

# 仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第八号



## ことばとその周辺

第八回

仙台周辺で広く文学にかかわる活動に取り組んでいるグループを「紹介するコーナー」です。

### 日々の思いを 五行の息づかいに託す

温室の中

クラシックを

聞きながら

微笑みをうかべている

蘭の群れ

えっ？ 字余り？

「いいえ、これでよい。」

これが五行歌です」

梅雨のさなかに「み

やぎ五行歌会」W.A.C

仙台五行歌会」合同の

例会を訪ねた。出席者

の作品に思わずそう質

問すると、代表の佐山

和実さんが静かに答

えてくれた。

会の発足は七年前。もともと新潟

で五行歌の会を開いていた代表の佐

山さんが、仙台への転勤を機に新たに

結成した。会員は仙台圏で三十一人。

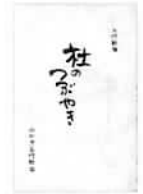
仙台をはじめ塩竈や名取からも会員

が通う。



和やかな中にも真剣みがあふれる例会は3時間にも及んだ。

### 「みやぎ五行歌会」



「みやぎ五行歌会」の五周年記念歌集

「五行歌」と

は草壁瑞太氏

が創始した詩

歌のジャンル。

「五行で書く」

「五行は一息で読める一句とする」首

数に制限はないが、歌らしい感じを持

つこと。ルールはとても簡素だ。

七五調は今でも日本の

伝統的なリズムとして定着

しているが、「古代歌謡を説

めば、けつて七五調にこ

だわってはいないことが分

かりますよ」と、事務局の佐

藤隆雄さん。

この日は十八首が提出さ

れた。肉親の記憶、逝った

剣い猫への思い、季節の移

るい……さまざまな題材が

自由な韻律で歌われる。

全員が同列という考えから「添削」

をしないが、感想や意見は活発に飛び

交う。「私にもそんな体験がある」「こ

の表現が重複しているのが惜しいね

最後にこの日の一席を。

「おみょうにち」は

他人を思い遣る

優しい挨拶ことば

ざらにない

仙台弁の特級品だ

雅良

(T)

●TBCラジオ毎週金曜日の朝五時から

番組に五行歌コーナーがあり、作品が紹介

されています。

●みやぎ五行歌会 事務局

仙台市宮城野区鶴ヶ谷三十三-十五

電話(022)251-0610(佐藤隆雄方)

## 学芸室日記



お母さんやお父さんのお話に、子どもたちも絵本の世界に引き込まれて……

●六月十九日、第八回「ことばの祭典」が開催されました。今年の題は「緑」あるいは「顔」。晴天のもと緑あふれる庭を散策したり、交流コーナーの机に向かい、手帳を広げて静かにことばを練ったりと、思い思いの吟行スタイルから生み出された作品は、短歌・俳句・川柳三部門合わせて約三百六十。そのなかから、「ことばの祭典賞」をはじめ各部門の入選作品が選ばれました。



選者の講評にも、参加者は部門の枠を超えて熱心に耳を傾けていました。

●その「ことばの祭典」短歌部門の選者を、第一回から三年にわたり務めていたいただいたのが、歌人・扇畑忠雄氏です。弊紙第二号「シリーズ私の一冊」では、自らの学問を「光」に、短歌の創作を「影」にたとえ、次のように書いています。「私の「光」とも考えられる研究(字)も、それと相重なって「影」の創作(元)と一体のものでなければならぬ。」「学者として、また歌人として、揺るぎない信念を貫き、文学への情熱を失うことのない姿勢に、ただ敬服するばかりでした。ご冥福をお祈りいたします。

●このたび「仙台文学館選書」第一弾として、土井晩著「天地有情」が刊行されました。「天地有情」は明治三十二年初版の晩著の第一詩集。そこに取られた格調高い数々の詩は、明治から昭和にかけて多くの青年たちに感銘を与え、なっていました。近年では人手が困難となっていました。今回の出版で手軽にお読みいただけるようになりました。本体価格八百円、当館のほか市内の書店でもお求めいただけます。

●井上ひさし館長の講演・講座をはじめ、当館で開催されたイベントの録音ビデオ約三十本を、館内情報コーナーで視聴できるようにしました。ぜひ足をお運びください。  
\*表紙の井上ひさし館長の文章は、六月二十四日に行なわれた第四回「仙台文学館活用セミナー」での講演から抜粋しました。

●夏休み恒例の「ことば文学館 えほんのひろば」が、今年も七月十六日から八月二十八日まで開催されました。「日びきのね」で知られる馬場のほるさんの原画展をはじめ、絵本コーナーやお話会に多くの親子連れが訪れ、館内にはぎやかな声が包まれました。会期中、初めての試みとして開催したのが、絵本の読み聞かせ講座です。絵本を読んであげることの大切さや、絵本の選び方といったお話を聞いたうえで、子どもたちを前に実践も体験した受講者の皆さん。ご家庭での読み聞かせに活かしていただければ幸いです。

「宮尾本 平家物語」 完結記念  
宮尾登美子の世界展  
生きぬく情熱を見すえて  
開催中  
11月20日(日)まで  
大河ドラマ「義経」の原作者 宮尾登美子さんの文学世界と 波瀾に富んだ半生をご紹介します。  
予告  
12月10日(土) 平成18年3月26日(日)  
佐藤鬼房展「その生涯と俳句の世界」

ことばは実は民主主義です。どんな間違ったことばでも、使う人が多くなるとそれが正しくなる。有名な例を挙げますと、芥川龍之介が大正末から昭和にかけて書いたエッセイのなかで、「とても」という副詞の使い方を気にしている。「とても」の下には否定が来る、という懸かり結びの約束があるのに、「とても」を独立させて、「とても素敵だ」「とてもおいしい」などと使うのに、芥川は嫌悪感を抱いていた。でも、芥川がいくら頑張っても、それがみんな便利だとなって使えば、正しいことになる。「ら抜き」もそうです。

いま、若い人のことばが乱れているようですが、若い人が作ることばのなかに百個に一個ぐらいは、役に立つのが出てくるんです。『チヨベリバ』なんて、一時期めちゃくちゃ流行ったけど、もう誰も言わないでしょ。あまり効果がないというのがわかったんですね。だから必然に廃れていくんです。でも、若い人のことばづかいで、これは便利だ、このほうがいいなと入ってくる、それは必ず日本語のなかに入ってくるんです。ことばはそういう意味では、民主主義的です。みんな決めていく。使えないことばは廃れていくので、ことばの乱れや若者語を気にしてはいけません。そんなことより大切なのは、私たちひとりひとりが日本語の力をつけていくことです。

(第四回仙台文学館活用セミナーでの講演から)

仙台文学館

館長 井上ひさし

仙台文学館ニュース 第八号

仙台文学館 Sendai Literature Museum  
仙台市青葉区北根2-7-1  
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044  
http://www.lit.city.sendai.jp/index-sml.htm

【表紙針穴写真撮影】黒田 カツオ 【本文挿画】古山 拓  
【編集・印刷】(株)ユーメディア

# 『チョココレート工場の秘密』



『チョココレート工場の秘密』  
ロアルド・ダール著 (評論社)

我が家には、ものごころついた頃からたくさんの本があったし、絵本や児童文学にも思われていた。今でも一冊一冊の印象が強烈に残っており、心の糧、仕事の糧になっていることは確かである。ふんだんに本を与えてくれた親には今も感謝している。

それタツチが違うから、この特徴ある絵を描いた人の名前だといふのは分かった。しかし、隣りに、しかも先に表記してある「さく」の意味が分からないのである。「さく」というのはなんだろう。ここに名前を書いてある人は、いったいこの本にどんな意味を持っているのだろうか。

田村隆一さん(実は、「やく」というのも長い間分からなかった)とても素敵な解説がついていて、この「ロアルド・ダールさく」というのが、「ロアルド・ダール」という「アメリカという国の人が、この世にも面白い話を書いた人だ」ということが分かったのだ。

田村さん(実は、「やく」というのも長い間分からなかった)とても素敵な解説がついていて、この「ロアルド・ダールさく」というのが、「ロアルド・ダール」という「アメリカという国の人が、この世にも面白い話を書いた人だ」ということが分かったのだ。



田村隆一さん(実は、「やく」というのも長い間分からなかった)とても素敵な解説がついていて、この「ロアルド・ダールさく」というのが、「ロアルド・ダール」という「アメリカという国の人が、この世にも面白い話を書いた人だ」ということが分かったのだ。

田村隆一さん(実は、「やく」というのも長い間分からなかった)とても素敵な解説がついていて、この「ロアルド・ダールさく」というのが、「ロアルド・ダール」という「アメリカという国の人が、この世にも面白い話を書いた人だ」ということが分かったのだ。

田村隆一さん(実は、「やく」というのも長い間分からなかった)とても素敵な解説がついていて、この「ロアルド・ダールさく」というのが、「ロアルド・ダール」という「アメリカという国の人が、この世にも面白い話を書いた人だ」ということが分かったのだ。

作り方を真似し、ワンカを閉鎖に追い込むよそのメーカー。金に飽かせてチョココレートを買って漁り、子供のわがままに癒えようとする親。善良で誠実なのに、いくら必死に働いても、社会の勝者から取り残され、子供と親を飢えさせてしまう主人公の父親。主人公チャリーは、児童文

学で昔から愛されてきた「生き延びた子供」である。赤貧の中、食べるものがないチャリーが、人よりも早く家を出て、ゆつくり通学路を歩いて体力を温存する、という知恵に、痛いような驚きを持ったことを今でも思い出せる。けれども、これこそが我々が生きる世の中の真実である。

と子供心にも感じたものだ。私のエンターテインメントの原点は、今でもやはりこの本だ。原点は、今でもやはりこの本だ。原点は、今でもやはりこの本だ。



恩田 陸(作家) 1964(昭和39)年、宮城県生まれ。92年、『六番目の小夜子』でデビュー。ミステリー、ホラー、ファンタジーなど、幅広い作風で多くのファンを集める。05年、『夜のピクニック』で第26回吉川英治文学新人賞、第2回本屋大賞を受賞。『象と耳鳴り』『図書館の海』『ねじの回転』『ユー・ジニア』『蒲公英紙一帯野物語』ほか著書多数。



## 宛一泰石 是がき 治宰太

畑井 洋樹 (仙台文学館学芸員)

昭和十六年、三十三歳の太宰治が速達で出したはがきが残されている。宛先は吉野作造を伯父にもつ、当時二十二歳の東京帝国国文科学生「戸石泰一」。

当時の交流を示すこのはがきで、太宰は「かならず和服。袴を」身に着けなければならぬ、「有楽町行の切符」が必要と「ちよつとよいところ」に案内しますと誘っている。

戸石は、この謎めいた文面に当惑しながらも、期待に胸を高鳴らせたであろう。翌日、荻窪駅で落ち合った後、太宰が戸石を連れて行ったのは文京区関口にある文壇の重鎮・佐藤春夫宅であった。



戸石泰一 1919(大正8)年~1978(昭和53)年

太宰という人間に、ますます魅せられていったのではないだろうか。戸石が出征してからも手紙を交わしていた二人であったが、戦後、太宰は流行作家となり、以前のように二人だけで気の置けない話をすることも難しくなっていた。そんなところから両者の間に段々と感情のずれが生じていくのだが、このはがきは太宰と戸石の間にあった、師弟というよりは年の離れた兄弟のような交友の一端を物語っている。



# 三ヶ島葎子書簡

## 大正二年、原阿佐緒に宛てた三通から

本多真紀（仙台文学館学芸員）

原阿佐緒と三ヶ島葎子、ともに与謝野晶子に師事した二人の歌人の交流は、葎子の日記や書簡集によって知ることが出来る。ただし現在まで、大正三年以前の書簡は確認されていなかったが、当館ではこのたび、大正二年の葎子の阿佐緒宛書簡三通を新資料として収蔵した。その文面からは、歌を媒介にして友情を交わしあった二人の、知り合って間もない頃の様子が垣間見える。



互いの子どもを抱いた葎子（左）と阿佐緒 1915（大正4）年3月 原阿佐緒記念館提供

### 晶子への傾倒

大正二年三月「アララギ」に入会した阿佐緒は、五月には与謝野晶子の序文を掲げた第一歌集「涙痕」を刊行。しかし、最初の夫と離婚後、幼い子を抱えての故郷（宮城県大和町）での生活には困難が多かった。一方、葎子は東京小宮村の小学校で教員を務めながら、「スバル」「青鞥」などに歌を発表。秋頃から恋人との結婚話も出始めるが、日記には気持ちの揺れが記され、歌作上の迷いと相まって苦悩が続く。そんな二人は、大正二年七月頃から互いの境遇を綴った手紙を交わし合い、親しみを増していった。だが、話題の中心はやはり短歌のことで、以下の葎子の葉書は、阿佐緒が「アララギ」入会後間もなく、葎子にも参加を勧めていた事実があったことを伝えている。

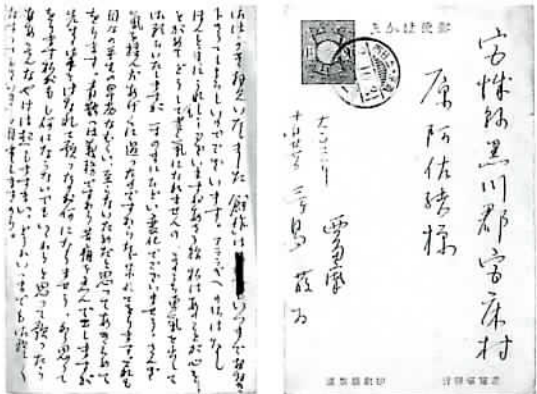
〔前略〕アララギへの御はなしほんとうにうれしうございますが、あさを様私にはあのことか心をとがめてどうしても書く気になれません。（中略）先生の御手をはなれて歌ったのが何になりませう。（後略）（大正二年十月二十七日付）

阿佐緒の勧めを葎子は受け入れないが、その理由は「あのことか心をとがめるから」とある。「あのこと」とは何であろうか。この翌月の手紙に葎子は、

〔前略〕九月、創作へ歌を少し出したでせうあれはたしかに悪かつたのです。なぜって先生の御言葉にそむいたのですもの。その時には何とも思ひませんでした。したがこの頃つくつく悪いと思つてをります。（後略）（大正二年十一月十七日付）

と記し、師である晶子の目を通して、若山牧水発行の雑誌「創作」に歌を投稿したことの後悔している。先の手紙の「あのこと」というのも、同様のことであろう。これらの書簡や、葎子の日記にたびたび現れる「与謝野先生の夢ばかり見た」「どうかし

て永く与謝野先生に接してみたい」「与謝野先生は絶対の權威でいらつしやる」といった記述から、この時期、葎子がいかに晶子に傾倒していたかがわかる。葎子にとって晶子は、自らの歌才を見出し、育ててくれた師であり、崇拜の対象でもあった。ここに、晶子に師事しながらも、歌壇の趨勢に乗り、いち早く「アララギ」に加わった阿佐緒との相違を見ることが出来る。



葎子の葉書 1913（大正2）年10月27日付

### 葎子の胸の内

華やかな美貌の阿佐緒と、地味な葎子。裕福な家に育った阿佐緒はどこか浮世離れしていたが、教職に就き社会に出た葎子は、現実の理不尽さを味わっていた。そんな対照的な境遇を超えて両者の親交は続くが、当初、葎子は阿佐緒に対し、歌の才能は認める一方で、羨望や嫉妬の

念を抱いたようだ。大正二年九月二十二日の葎子の日記には、送られてきた「涙痕」を見て、「きれいな歌集」と嘆息するくだりがある。その後、十一月九日の項には次のような一節が記される。（前略）原さんは与謝野先生に度々手紙をいたたくさうである。同じ弟子でも自分はやたらにいたいたたいた事はない。それは原さんがそれだけの人格を持つてあてそれだけの手段を尽したからである。（中略）自分はそれだけのことをしなからい。

### 微妙なバランスの友情

大正二年十二月十日、葎子は晶子からの葉書を受け取る。「スバル」の後誌として創刊される「我等」に、歌を至急送ってほしいというのだ。葎子は舞い上がって早速五十首ほど詠み、少しでも目を通してほしいと、編集部宛てなく晶子に宛てて投函する。そして阿佐緒にも次のように書く。

〔前略〕歌といへば阿さを横よるこんで下さい私の歌が間に合へば「スバル」の後身の「我等」へ―たしかあなた様方のご御一しよに―想像ですが―出るかも知れませぬ。出ないと思ふよこびになりますから出たら委細御話いたします別に理由もないのですが御一しよに出たら大願成就です。（後略）（大正二年十二月十二日付）

葎子は阿佐緒に、「我等」への寄稿が、晶子からの直接の声がかりによることを明かしてはいない。だが婉曲的にその喜びを伝えることによつて、自分もやはり晶子の愛弟子なのだを再認識し、また阿佐緒にもアピールしようとしたのではなからうか。葎子の思ひは叶い、年明けに創刊された「我等」には、葎子と阿佐緒の歌がともに掲載されたのだった。

これら葎子の手紙に対する阿佐緒の返信は、一部を残して焼

失してしまつたという。現存する翌大正三年三月二十一日の阿佐緒の手紙には、歌作に悩む葎子に対しひた向きにアドバイスをし、自身の歌風の変化については、葎子のように嘆くのではなく「進歩の一段階」と捉える記述が見られる。この文面を讀む限り、葎子が抱いていたような劣等感や嫉妬心は、お嬢さん育ちの阿佐緒には無関係なものだったと感じられる。そんな

阿佐緒のある種の純粋さは、心の底に渦巻く仄暗い感情を厭わしく思つていた葎子にとって、面映いと同時に、どこか救われるものでもあったらう。もしかしら、阿佐緒が知らない現実社会に對峙しているという点において、ささやかな優越を感じていたかもしれない。微妙な感情のバランスから成り立っていた阿佐緒と葎子の友情、そしてそこから生み出された歌の数々は、実

に不思議な魅力をもつて、読者の心に響いてくるのである。

〈主要参考文献〉  
倉片みなみ編「三ヶ島葎子日記」上下 昭和五十六年四月 至芸出版社  
同編「三ヶ島葎子往復書簡抄」昭和五十七年十月 至芸出版社  
同編「生けるもの悲しみ」昭和六十二年三月 水の原社  
秋山佐和子「歌ひつゝさゆるされむかも」平成十四年八月 TBSブリタニカ

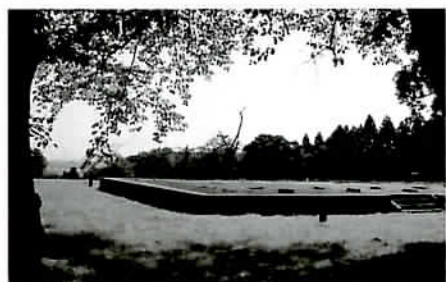
### 文学のある風景

第8回

## 国府多賀城駅～扇畑忠雄歌碑

多賀城に立ちて落日に向ひけむ  
家持をおもふまぼろしの如

JR国府多賀城駅前に建つ、歌人・扇畑忠雄の歌碑。1300年の昔、陸奥按察使として多賀城に赴任し、帰京することなく没した万葉歌人・大伴家持を偲んだ歌が刻まれる。この地に立ち、夕日を見たであろう家持。その老いた姿が、幻のように眼前に立ち上がる――



多賀城政庁本殿跡を望む。家持もここから夕日を見たのであろうか。



平成14年4月に建立された歌碑。駅を行き交う人々の目に触れることで、家持を追慕するよすがになれば、どの扇畑の願いが込められている。

「万葉集」研究者でもあった扇畑の、深い思いが込められた一首だ。

研究の傍ら、東北アララギ会を結成し歌誌「群山」を発行、長年にわたり「学芸の総合」を希求した扇畑が、もうひとつ愛惜をもって追い求め続けたものに、「経る里」がある。出生地の中国・旅順、本籍地である広島、青春時代を過ごした京都、そして60年以上住んだ仙台――自らの来し方を振り返り、こんな歌も詠んでいる。

北の国に乗り住まへる六十年  
わがたましひの鎮まりどころ

扇畑忠雄 明治44年、中国・旅順生まれ。昭和17年、旧制二高の教授として仙台に赴任し、東北大学教授、岩手県北上市の日本現代詩歌文学館館長などを歴任。仙台文学館の設立にも関わり、運営協議会会長を務めた。平成17年7月16日、94歳で永眠。

